

村岡大祐：若き藻類研究者の nursery として

日本藻類学会創立 60 周年にあたり、心よりお祝い申し上げます。学会に入会させていただいてからはや十ウン年、もはや年齢的・肉体的にお世辞にも若手とは呼べないことは自らが一番承知しておりますが、今回寄稿の要請を受け、恥を押して筆をとらせていただきました。しばしの間お付き合いいただければ幸いです。

筆者が研究生物としての藻類とはじめて向き合ったのは北海道大学水産学部の学生実習でした。今までの植物イコール緑という思い込みを打ち壊すさまざまな色彩、植物なのに花を咲かせることのないその奥ゆかしさ (?), 知れば知るほど奥深い藻類の世界に気が付いたらすっかりはまりこんでしまいました。ほどなくして大学院へと進み、藻類学会の存在を知って、初めて学会に参加した時のことは今でも忘れられません。学生である筆者の拙い研究内容に対して、論文でしか名前を拝見したことのない方々が真剣に耳を傾け、様々な観点から貴重なアドバイスを下さったことに驚きと感動を覚えました。「ああ、これが学会というものか。自分のような若造でも居てもいいんだ」。それ以降、藻類学会で巡り合った多くの研究者と、彼らの口から語られる興味深い研究内容の数々は、ともすれば一面的な観点到に陥りがちな筆者に、さまざまな角度から考える機会を与えてくれる、何ものにも代えがたい貴重な財産となっています。

大学院を卒業した筆者は、幸運にも東北区水産研究所に職を得ることができ、三陸沿岸を中心とした海藻草群落とその生態的役割についての研究を開始しました。大学では紅藻類の細胞生物学を主な研究テーマとしてきた筆者にとって、今まで経験のないフィールド研究は戸惑いの連続でしたが、学会で知り合った方々からのアドバイスも得ながら、どうにか研究の体裁を整えてきました。リアス式海岸という特異な形状を持つ三陸海岸は、湾口の波あたりの強い岩礁地帯にはアラメやコンブ類の褐藻群落が優占し、エゾアワビやキタムラサキウニといった植食動物の餌場として重要な役割を果たしています。一方、湾奥には砂浜が広がり、そこに生育するアマモ類の群落は外洋からの波を和らげつつ葉上動物に生育の場を与え、それを餌とする幼稚魚の保育園ともいえる生態系を作り上げています。これら沿岸の動植物によって織りなされる絶妙な生態バランスは、筆者の好奇心を掻き立てるに充分なものであり、様々な分野の共同研究者とともにそのメカニズムの解明に微力ながら取り組んできました。そんな中で



起こった東日本大震災は、東北沿岸にとてつもない被害を与えるとともに、日本社会の価値観を根底から覆すような衝撃を与えました。この緊急事態に際し、いち早く被災した研究機関の学生受け入れや研究施設の復興支援などの方針を表明して下さった日本藻類学会に対し、被災地の一学会員としてこの場をお借りし深くお礼申し上げます。

この震災を契機に、学会というものが社会に対してどのような存在であるべきなのか、様々な局面で議論がなされております。今後は学会による社会貢献も今まで以上に求められるようになっていくでしょうし、公的な側面を持つ団体である以上、この流れはある意味当然のこととも言えます。しかし、同時に学会は即応的な社会利益に繋がらずに基礎研究とそれを行う研究者を守り育てる責務を負った団体でもあります。三陸沿岸の生態系と同様、多種多様な研究を内包する懐の深さこそが学会を強くし、次世代の研究者育成の場足り得る必要不可欠な要素です。震災に伴い、幼稚魚保育の役割を持つアマモ群落の多くが消失の憂き目にあいましたが、日本藻類学会はこれからも、若い藻類研究者の nursery としてその役割を担っていただきたいと考えます。筆者も、自らを育ててくれた藻類学会に微力ながら何らかの恩返しができればと思っています。

(独立行政法人水産総合研究センター東北区水産研究所)